

自蹊庵便り

令和四年 皐月

NO 156

茶から心へ、心から茶へ 往還の道

先日、久松真一氏の特集記事にふれる機会がありました。久松氏の著書を古書店にて捜した時期もあつたのですが、いつしか目の前のことに追われ、宿題が残されたまま遠のいておりました。

只今、この時に出会わせて頂いた幸運に、また、フツフツと思いが蘇ってまいりました。…と云う云い方も正確ではないかもしれませんが。

なぜならば、只今のわが師の中に久松氏の姿と同じ世界を見せて頂いているのではないか…という思いがいつしか強く芽生えていき、充分に目の前の時間に努力し、費やすことに定着していった…というのが正しいのかもしれない。

私が久松真一氏の資料として知り得ているものは微々たるもので、妙心寺塔頭春光

院の奥の一軒に住まいしておられたこと、そこに妙心寺僧堂の雲水として、九州の龍淵環洲師がおられ、その縁で南方録の立花実山自筆本を初めて公開されることになったことぐらいでした。

今、ここに特集記事に触れる機会を得、その資料の一端にふれ、思い実感いたしますことは、目の前のわが師の世界をしつかりと心に焼きつけておくことに尽きるということを再認識したしだいです。

茶の湯の一服、茶道の一服が人の心を清め、高め、深める自己陶冶の道場であることを確信するばかりの今日この頃にございます。

二十年ほど前になりますでしょうか、わが師に茶とは？とおたずねした折、「白露」と一言おっしゃられた、その言葉の深さの入口に少しは近づけたのであろうか…。

この二十年余、通い続ける露地の白露を絶やさぬために何処も遠出をなさることなく、しつとりと濡れ過ぎず乾き過ぎずの露地の佇まいに、いつも涙を落とすのです。

あの語らずして語りくれる露地、一步茶室に入れば静かな気がピーンと張りつめた、説かずしてお説きになっていくような空気感の漂いの中、穏やかにかつ端然としたお姿に、あゝ、私のような粗忽者をお引き会わせくださったのは神仏の御加護というよりは御慈悲としか思えぬのです。

師の前で濃茶一つも未だ満足に点てられず、湯を張って茶筌を動かすと、香を逃がさず、湯の冷めやらぬうちに、茶碗の中には見事なるつやを放ち、静かな輝きをたたえたその一服の茶を私はいつになったら点てられるようになるのであろうか…。

情けなく、これまた涙を露地に落とす

がらの帰路にございます。なれど幸せな涙、贅沢な涙であることは解っており、何ものにも代えがたい有難い時間にございます。

「茶から心へ↓心から茶へ」久松真一氏の茶の精神性は一貫して「心と茶」の相映相入であり、日々の精進による心悟にあつたと云われています。

ここに特集号より一部抜粋して述べさせて頂きます。

「茶から心へ」の道は、真心無相の自己に至って極まる、実は真心、無相の自己に至ると云うよりは、覚（めざ）めると言っ

ておく、これに対して「心から茶へ」の道は狭義での茶湯の枠を超えて、生活全体に拡散浸透して、生活を茶道化し、進んでは社会を茶道化し、更には新しき文化創造、歴史創造にまで具体化しなければならぬ…と力説されています。

久松氏の生活の茶道化の典型が氏の生活のすべてであったように、わが師の生活も茶道そのものであります。

世に立派な茶道の師は余多居られるとは

思いますが、私が点てた粗末なる茶に、ふつと息を吹きかけるがごとく静かに点て直してくださる。この一掬いの時の瞬間、瞬間を心して掬いとることに余念なく生ききらねば、恩師八十五歳、われもまたあと少しで八十路の道を追う身であります。

茶事千回以上の場数を重ねるも、この濃茶一服のための茶事なるを、教えを乞いくる人々に感動をもって帰っていただけのお茶を点てられるようになりますのは、いつのことでしょうか…。

残年乏しき時間にして、人々を誘う道場に辿り着くことができるのでしょうか。

茶道は茶から心への道であり、心から茶への道であるという久松真一氏の言葉、茶道の具体的な形はこの二つの道の往還であることをしみじみ身に染みるこの頃にございます。

追文

久松氏の住まわれていた庵は抱石庵と云われ西田幾太郎氏からのもので、寒山の詩中に見える「白雲幽石を抱く」からのものと特集号に書かれていて、なぜか、はなはだ厚かましいことになっていますが、ドイツのレープ家の家紋からお許しを頂き、わが家紋として「石を抱く鶴」にも似て、ルーツは違えど石を抱く類似になぜか単純に嬉しくなり、また心茶会を作って長老達とのサロンを開いていたことの偶然にも驚き、真茶という言葉もシンガポールに出張した折、国宝級の書家のヘンリー氏に書いて頂いた「真茶」という言葉も特集号に随所に拝見でき、嬉しくなりました。わが稚拙な心にもなにごえとなく力が湧きくる思いにございました。